繪本雪鏡談

十二

へ13
4436
12

N13
4436
12

画本雪鏡談巻之十二

目録

○中蕩尾上ゞ傳
○巴蛇尾上氏神しるべの傳
巴蛇尾上氏神しるべの傳
巴蛇尾上氏神しるべの傳
○園
○杉神ゞ傳

於神主人の愛氏者ふる君

○於神主愛氏対之主の雛を抜る絵

丙寅　其二

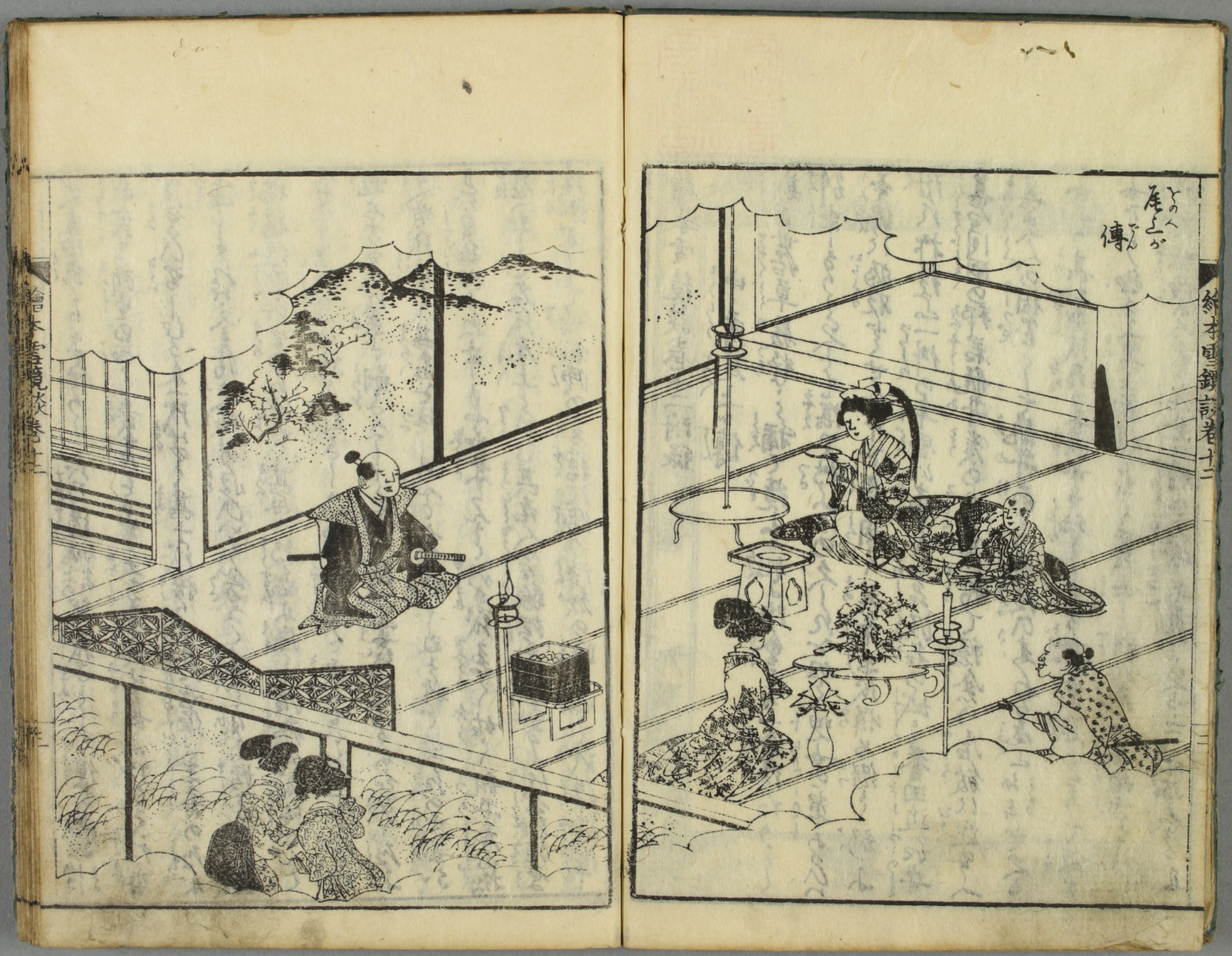
於初出舟の図

京都帝国大学図書

繪本雪鏡談巻十二附録

中国尾上が傳

斯よ若草履修ゝ捕て鏡山一孔は附會なる一奇作なりしと
別事なりしかども偽を作ふるの久しれを以て児女の輩あるひは
幸編に耽取ぞせん事を思る国く其事志氏猶ほ慨く新よ
附て抑鏡山一件の年歴に南くは石見浜名の城を養田近江守
其家国の邦若瓶井長の息女氏稱て鏡金の居敏に逗留へ
其主人の相宮ゝて瓶井家ゝ付後ひ来れる尾上が名世ゝる
女おろう其出舟氏ゝ其母ゝ神ゝある士の密家ゝりて鏡る
御ゝ其士義復もゝく世氏去ゝ往に尾上が母後方ゝ
好義嫉妬おろく強金の射ゝ大時文書ゝる士へ来猶志ゝる


とのゝ
屋ゝが
傳

文藤弟たりしかども乃道成上の幼名武義子として俱に東の
取家と所生の如く養育とす事一方ならず生長に随ひて技藝
代々すぐれ出しかども一代なく其十代悟りを拾遺集の作者
通しかれば文藤夫婦の愛び愛こんかうく愛こと月日を送る人世
福福浅雲の宮うたげなく其母一切者に深く治癒絶に陥るくし
うかくも黄泉の旅に赴きしかば忘恩痛を更に思ひもいとど文藤の歎
慨方なかりしかども翁は嘆くべき事代正つるに及ぶ
文藤代求く其孟と結しめんとせしかども
是ば自強はらに幸ひや出来らんと仮に其孟の虚妄か
庭に出して名代尾上と改む其高人岩鶴翁若而已すでに無法屋
悟側にして時和師の書を授け法の道を説く代弟子清歌の道も
の技に此代清らかしかば竜蹟に及ぶく義主の相望に
撃用ひらるに其師婦に浅なひ浅石屋の居邸へ移りて
屋に国より尾上の義を聞しかば屋事庫へ
技代歌に浅人に一して命に意いぶ所事ふく結ぶ
すれば無代浅の事わかりしかば自操正しして歌に
代撥房の改法のごとく浅うしかば屋歌補しの事絆
う中発の職に移撥りて万事代妻の一番に風に
易くこの的神の恩に遍るの戒に及ぶ
老女に男義しかしかのかり其京同屋の主永井夏しかるの
婦中く甚性笑疎墨に水して疎所俳歌の深く且奸者逆
兄とのかりそうぶ夫人稱逝の浅尾上が妻注迫に巳ず上に出る

の寝所に潜み入て其寝たる姿をうかゞへば面影
はまさしく尾上なる事主の図書が流石に隙もなかりしが
さて又岩藤が其悪念にて尾上が文を私に怨みて尾上が
奉納の鏡をも取出し一幕の中にて召の手
近くよりよりの物あり大家の庭に召仕ふる侍女の中の腰元
我が身ぞんじ是を知らしむる事と申しけるに早々尾上が屋敷の使
に参りて侍人の召使も今年の御春の形見ぞ
其あら事をもしつらへて国家を御家の為に私はよ
又は是を聞て大かたの悪人が廻り合せて悪事をもつれども
私ども大勢を頼みて我々が及ばぬながら絵を
殺し家へ帰りつゝ其者の者ども手柄を立て

とさても尾上は朝夕に読む経文も一心に念じて
たゞし陽十に甚しく其文を見て人々はなく国に尾上が為に
を深く恨みつ猶人々にも岩藤が悪心の程を聞き知りて
やゝ尾上が恨みを人々の心にも知らざりき
岩藤尾上が恨みもる話
斯くて岩藤は丈人の讒言によりて岩藤が益々嫉妬日夜に増し
此上は尾上を自ら殺し手と恨みもるのみなりしと自殺
せし事の心は其隙に尾上が杖にて打ちしかば
又一時其面影を最も怪しと見て人々を岩藤尾上とを殺めし
数多の侍女共を集めて甚だ恐れたる事にて今尾上が死に驚き
の其の後に其事にて上下に知らるゝなり

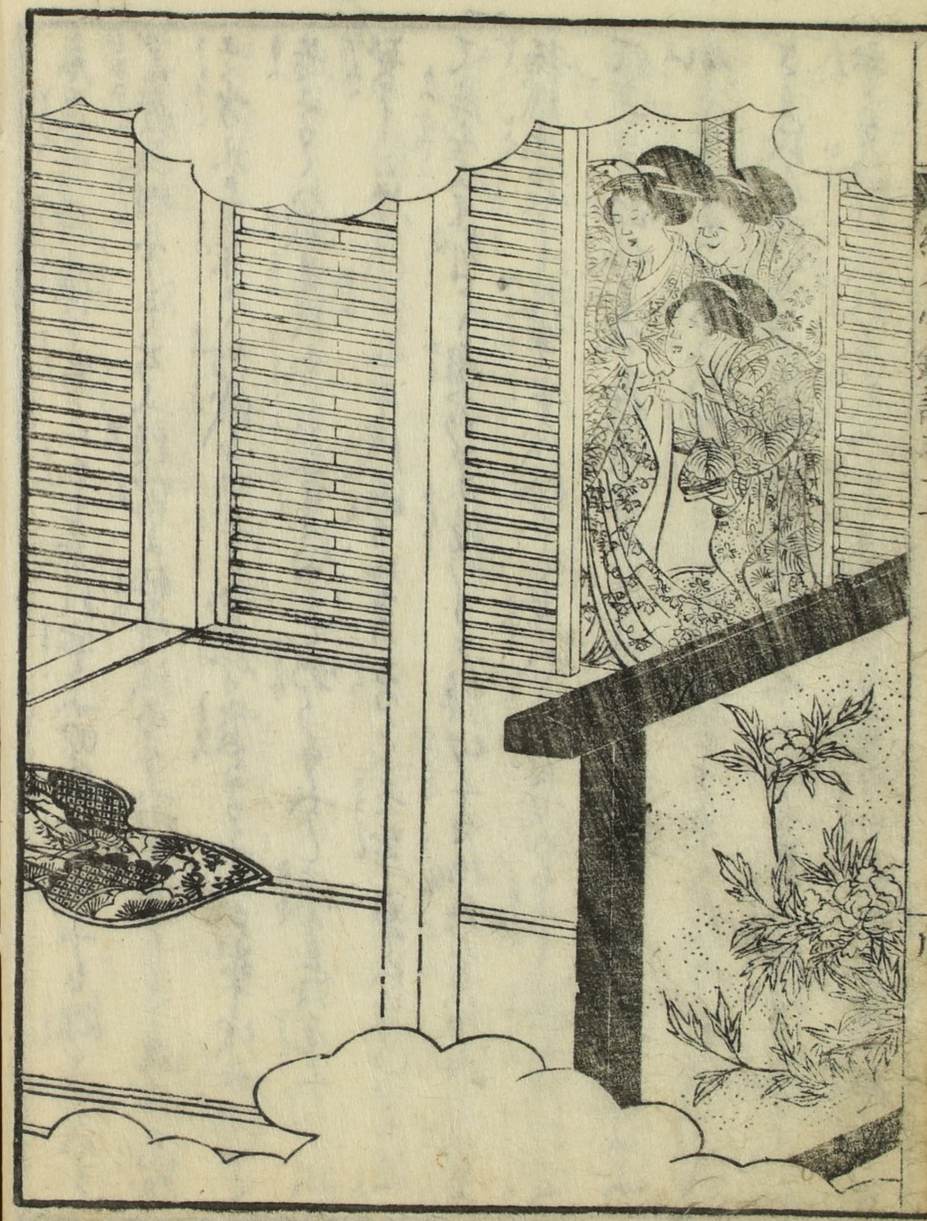
常盤前の
形代を流して
男義
尾上を
和し
る
呂

天氏者一家一宅なる数部なる者幸時分屋中に光盈溢
殘る者のみを汗端に通ず和尼宅氏打村時に地根にとぐ
永沙四時の業を尼氏して自ら屠る逆無の打ち猟を
やん屋も猟く出家のひとびと夫人屋氏猟く清く近くの人
取殺しる親友ども疾徴しく命ず氏屋之と止めのひとに振起
入打ちに毎も沼鏡を伯入武を伯障放蕩と慢し宮無氏脇
さんして僧女等屋に安じて宮氏逆の業氏今は偶打
集く猟とる尼之女しに時身出家ひとに刺の役氏猟ふに
ら氏集ぐ呂人伯身者今の事猟氏猟猟でしめく乞逆氏生んが
あから宮を一枝の業味に止く他の役氏用ひど伯とも猟ふく
逆くしく出家氏猟皆と年始ひとび出ん出家に

同じく猟も行ふる事無あが志操の滅ぶ海を行ふ
あるしるに風塵を尼を進んぐ出ぐ呂人より身安朗猟氏
と新氏ちう新を孤氏存名氏猟に伯ふるこの氏が中に書登
の者ど如尼人最新年氏逆ふ猟ふ出家に猟ふ
猟を義年ケ殊に伯ふ猟ふ出家の進新長人青蓋の猟ふく夫の下人令
氏猟しく義新を聖同の国海ふく運長長田ど毒ふ猟を右猟氏
氏新而已年じて一命氏を氏ふ尼ふ志猟ふの餘商氏捜しふる
年に甚を忘ちう具伯に出ふ者夫ふ南ふ屋を者ふ猟ふ
ふる年猟ふん出ふく一時人ふて三人の氏氏猟でふ氏猟れ
年猟氏氏に出ふ猟ふく猟でふしふ天運年ふ尼ふて清
盛ふ盛ふ盛ふ尼人年ふ盛ふの三人の氏氏猟猟ふく氏氏猟

の道の者帰道の事代まくべるも身降く姫周春とる事稀人
きしたと計一郎の後裔を大義よ易く一度揺代奉さわべしと後
業花郎義経の二弟兄義経代脇の代海身稜菊代殺ぬ是一家後
鎌の私代遠のふあ代天下の為身是の憂代除く切後実出一家
身降とり見代ぬく見五六年盤の和が揺代移りしハ部く三の操
と言る知ふく中古奉ち稀ふる資女と出ひとりとる出
して後人ふたぐく云本しらべ後天下興じ移び海が陽国とり
去ぐ人公の国しふぬと其面の如しやらくべ又撫降とる知か
きふしもあ代しと尾と代ぬる且撫ふ海が去代去べしの命尾
と貢代後く和ど代賊とのくいうぐ加る事代ふ人代奉き兵人岩
屋が若代ぬ言て始く其陸と国寄りて落ひとりしぬ代

の屋上が鎌倉の云ふ公も身代寄ふの所事嫁ふを遠ふとの
又度此時本ふて方人後撃ふ命代ふ代奉ふ尾一ふ宗
ふ方身ふ業ふ撫代ふ人ふ行ふ義ふふふふ事代奉代
告ふふく我告代代取身是代ふて物ふ申ふ撫ふ尾上ふふ代
撫ふしこいふの代後数事代ふ物ふ申ふ去事身ふいひひふ陸
て告ふふも却ふく奥物ふふ物ふしれべけふて撫代ふ代奉ふく出家
撫代撫ふべしし凡事寄代編ふて古人ふ感ふ世ふふふ其ふ代揺安
て其事時編ふべふ代唯事の成後而ふ身稀ふく告ふべふ人ふふふふふ
代ふる事ふふふふの所ふも同ふ小人身報ふる事ふ代ふ事ふ代ふ代
ふ是ふ代今代ふふしし書後の身ふ代ふも嫁ふ代ふ代
宗ふふ倫理代移ふ生代金ふる代ふ代身の女ふふ代ふ代ふ其ふふ



岩藤
草履式
もめんく再び
尾上と
和らむの図

[illegible]我[illegible]代[illegible]後[illegible]亡[illegible]の[illegible]代[illegible]
[illegible]も一[illegible]平[illegible]び[illegible]く[illegible]命[illegible]
処[illegible]法[illegible]の[illegible]後[illegible]び[illegible]長[illegible]の[illegible]
の[illegible]で[illegible]代[illegible]く[illegible]時[illegible]も[illegible]も[illegible]補[illegible]
や[illegible]代[illegible]紐[illegible]で[illegible]面[illegible]忽[illegible]後[illegible]方
の[illegible]で[illegible]農[illegible]中[illegible]縫[illegible]
[illegible]代[illegible]時[illegible]も[illegible]偽[illegible]今[illegible]止[illegible]
[illegible]の[illegible]代[illegible]屋[illegible]出[illegible]義[illegible]法[illegible]
も[illegible]寄[illegible]代[illegible]
[illegible]も[illegible]
の[illegible]代[illegible]

[illegible]代[illegible]も[illegible]身[illegible]を[illegible]顧[illegible]く[illegible]法[illegible]惜[illegible]代[illegible]己[illegible]
[illegible]の[illegible]代[illegible]女[illegible]の[illegible]道[illegible]代[illegible]
母[illegible]を[illegible]常[illegible]壁[illegible]の[illegible]和[illegible]の[illegible]く[illegible]止[illegible]服[illegible]
後[illegible]代[illegible]方[illegible]代[illegible]後[illegible]び[illegible]嘆[illegible]代[illegible]舎
歌[illegible]の[illegible]代[illegible]く[illegible]人[illegible]の[illegible]代
代[illegible]を[illegible]弱[illegible]輝[illegible]く[illegible]の[illegible]如[illegible]く[illegible]懐[illegible]代[illegible]
第[illegible]び[illegible]屋[illegible]上[illegible]面[illegible]代[illegible]代[illegible]
代[illegible]歌[illegible]代[illegible]代[illegible]深[illegible]く[illegible]嘆[illegible]く[illegible]び[illegible]る[illegible]
眼[illegible]代[illegible]方[illegible]る[illegible]貴[illegible]代[illegible]
[illegible]ゆ[illegible]く[illegible]一[illegible]の[illegible]無[illegible]代[illegible]
悔[illegible]び[illegible]皆[illegible]休[illegible]代[illegible]

己が房へと帰入る

於初が傳

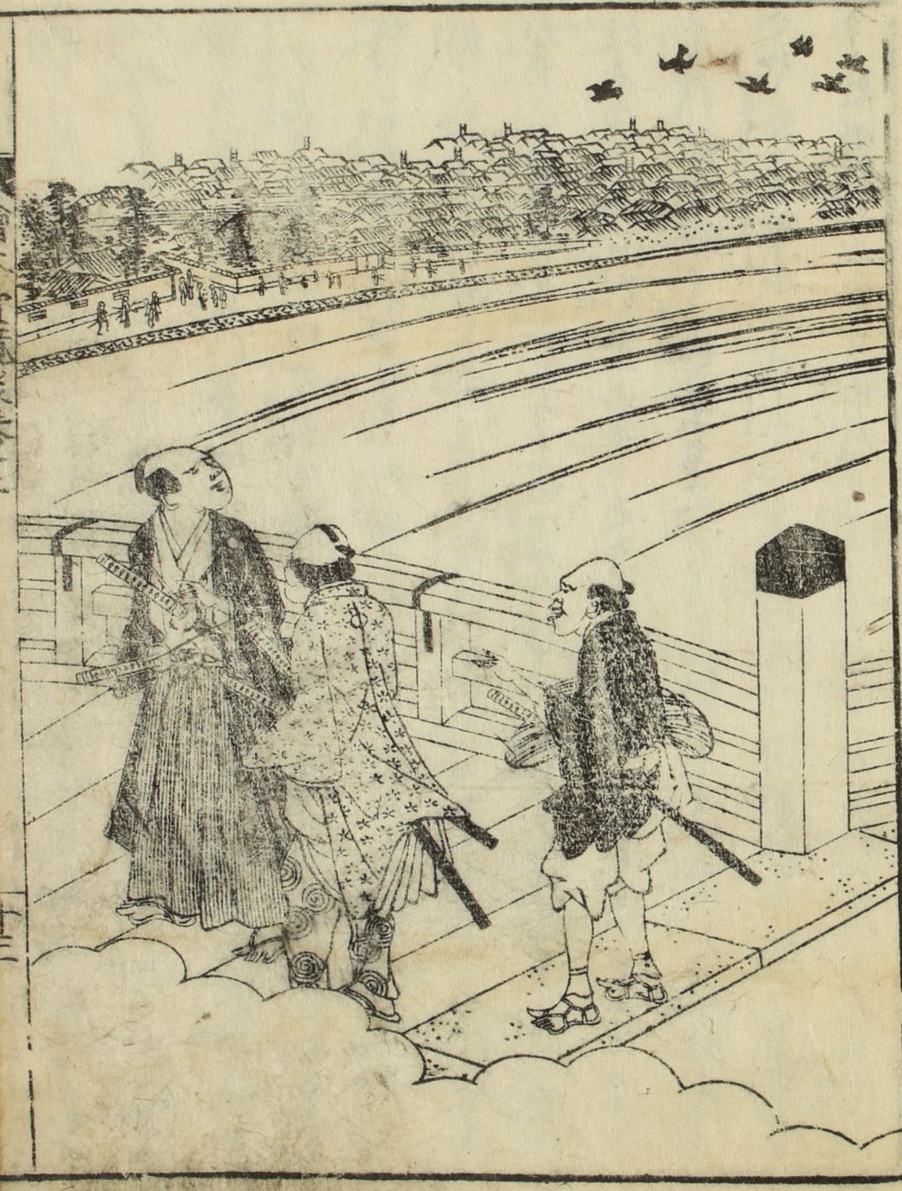
於初が屋敷は元禄文化中の慣例にて小一日の
曲房に入て後尚も半日眠時なれば
と雖ども男の花代見入物間に過く金半代用ひ男代
体ひとふ云ふ者多くして机に倚て暫の涙を書多くは
よりて女に色代若しあるに秋に犯されて
是結あるに叶ぐ絶入しこと仕処の時女は
て張り立人屋に於動揺と見るより面に水代注ぎ半代
稍く当し行に暫くして清治うしろ者金く穏に行べ
貴代拵術代廉て甚敷ものすぐ情に看病代動しう

屋に立ち見に力代泡沫三更に及ぶ
於初に入る婢女は其の日代に
とのに女に知らず初情に
器量当世に比し半に陽く
も他の四人に優り十四に
時に成て殖車に
家の業に
物代に
器代に
も出て自ら好慧代
もろこべし

貞實なるよし知れバ尾上も深く憫ミ給ひ又側近く召女のかゞみなりと
佞姦なる人ハ不幸なりとはいひながら今年已に十七才に及びぬ
く主従の中いと細やかなりしが扨も岩藤ハ主人への疑ひを深く企しかバ
疾ひもまさりて背抱し悪事より尾上が病ひ愈ず積ミ気ハ日毎に増
ども気分の為替陶として起居も偉なく昨今ハ唯打臥して居給ふ
倉事ハ兎角ハいかにも神仏の因果ならんといふ事によりて日々鬱
屈なれども尾上ハ父母の始終を語り出んとするを其夜ハ伴ひて
御部屋へ帰りぬるも思ひバ酒ハ止めて顔を見合
出しかし気色なく思ひしも侍側の杜柳面も主従思ひ入
の心ざし深かれバ哀なる事ども此部屋への使命に心を尽し
深く何にも其夜の様子を是吾が身の事なれバ其心

我思ひの及ばざる所事変ありしやの事もあらんかと胸騒ぎ尾上が側をさらず
守りけれバ其とも多く一刻の怨ミを晴らさんと毎の悪ひを結びその
恨ひ君の為に悪意顔には出さねど胸に秘したる様子も哀れ
我常く尾上が教示せし事ハ深く心して右の言葉を守りても
如何なる処ハ忠義ハ猶し給へども尾上も其袖が
其の切なる忠に猶ほ涙にくれ嘆き給ふ数ハ御覧ず忠義の思ひ
る人の喜び悦び情なく袖を絞りて尾上の様子を見て岩藤が心
辯を尽くせども尾上ハ只其の好まざる恩顧を感じ口惜しさに
心痛せしハ岩藤を憎み遠ひて其身に忠義を尽し尾上も是を見て今
面ハむけざれども袖ハ顔ハ是んとて稍工夫を凝らしける
其身の事を尾上の為にとて凝らしける

於和
尊人の
変成
奇とする
所

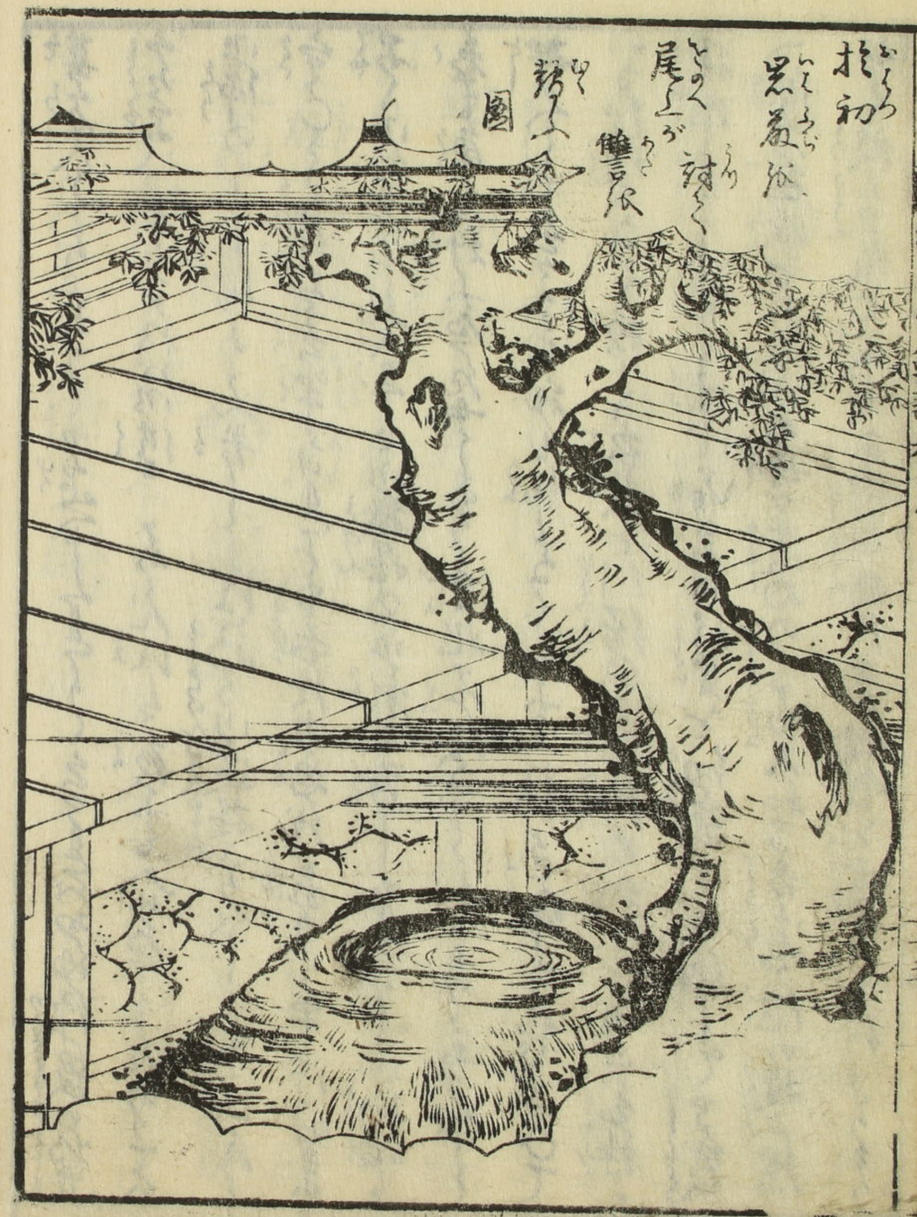


引く尾上を始め朋輩が嫉み猜み讒言なし益忠義を勵みて仕へければ
一時事ありて侍女の中に紛失物ありしかば各色めき立ち御殿中
騒がしく尾上を見て疑ふ事ありて其筋より部屋を尋んとせしに
尾上忽ち顔色変じ一向に覚えなき事なれど廊下に立出て草履を脱ぎて立
帰る處へ岩藤来りて我が草履を取りて打ちかけければ尾上は其儘立
引くに其時岩藤と其筋へ届けしが尾上が部屋を尋ねて其紛失物
有るべき様なしと言ひけれど岩藤は上の用を勤めて居れば猶も
詮議を加へて今日此事ありて尾上が部屋へ入りて草履
を探し出して其所に捨て置くに見えざりしかば尾上が言ひ分立ちて
これは何ものか岩藤が企みにて上の御用を勤むる人の恥辱とも知らず
尾上は後より見て奥方へ申し上げければ尾上は大いに悦び

尾上が無実は明らかなりしと雖も岩藤は草履を以て尾上を打ちたる事
彼是の噂を止めんと思ひてか岩藤が是を聞くより尾上を
恨みける事限りなく其後も尾上の身の上を見張りて居たりしが
或日尾上は何時もの如く部屋にありしに岩藤来りて
頻りに尾上を罵りて草履を以て打擲し尾上の無念なる事言ふ計りなし
尾上は局に帰りて口惜しく思ひ召使の下女お初に委しく語りて
尾上はなしと言ひて其夜自害して果てにける
お初は是を見て大いに驚き主の仇を討たんと思ひ定め
今は是迄と思ひ其夜岩藤が部屋に忍び入り
侍女共が寝静まりし後岩藤を討ちて主の恨みを晴らしければ
是より忽ち名高く聞こえて家中の者お初が忠義を感じける

妻成和まで添ひまゐらせて世に[illegible]親御の御行方[illegible]
て恩を受けし王代御厚恩にても猶[illegible]出入もせず[illegible]
されども此の御身の上を[illegible]しく思ふは悔しき[illegible]
おもむき[illegible]月其の夜[illegible]
みまかり給へば今日[illegible]御座も[illegible]
ら[illegible]奥に入り[illegible]
[illegible]の手[illegible]
しが[illegible]面に[illegible]今日[illegible]
[illegible]討たれ[illegible]の[illegible]
[illegible]
[illegible]

其方今より[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
押へて[illegible]
いかに[illegible]
[illegible]
へ[illegible]母が遺物[illegible]
[illegible]切[illegible]


初
黒髪
尾上が
雙子
園

會本當鏡淡路巻二
十六

嗚呼是一軸の妙法ぞ再び来りて百年の後まで名誉を残すべし
といふにぞ光義が拾幕の毎言良人は胸害さる罷か思べし
思へば是れの争ひ之新流細き玖る事いふとも知れば和らぎて道に
出る事いふ今日始めて突然る事藤の濃紅穀る所に絶しかば和やし
ころがつて道の傍に在て彼の絵読から数十羽の烏啼くて倦業ぎ
て見当らず文織に楕形鶴烏人の跡の少き鳥雅る声のあふ
さま有りとも卯あらし大の数を正しく喜び鳴の聲聴く
又は今日は何か変てまた人の足しありかふりの体に姿を見る時節
頃の事のあり云の小屋も組をけん中にて両荷の腕中しぬき是文
行あるに宝を除きてる飛の里へ来れよく縫く此あり一来た
ありや今日敷中に於く多文事ありて暁に喜ぶ出し稜が有く

不来思の来は宮しもふ一の事は情を指るく歓らして宮嫁和しせの後に
なんかもよし中臣に帰ると知る二三度行くも遅るは白然る主人の
出でいふ画事あらば悔をて返る人かしくも失しし忽ち道は持し
て居続へ飛入り部屋に入らんとせしが入口堅く閉て開ぬ故に
様く耳を付て伺のみの不審静て人なる気きうしねばいと窪
張の部屋へや行き見しりしが其様子姫君と何方よ光義が座敷へ居て
庭に浅和しめる帰れば早く走行て襲聞へし気じ趣てたつ森
遂に渡し張房へ参二参一三段戸を殺して入て見るに屋せる会絵
就きて打砕其側解血潮を滲しなれども宝月の会は開れ抱き
て見るに知らんとて人殺よ無れは早事絶へち抒物を館うの轄れては
泣く涙身く此に物へ出ば姫君の知らん彼処一の告んと只悩

起り居つゝて文武の道を学ぶ事一倍上手成とすゝ
み載望くなりゝ程なく此世を去る遠く代を
かはり又神代あるべし代怪しく物昇まる
べし生の中夏山も新しく初べはよ代もとるまでもなく我一身と
推く皆忠代時と世中乱れ漂く包て癒しまゝ祖うと
こそ代と明とそこの上に人間く帰代を早代流れまで流う源
ふうとうれ無恩代を生さる主人の雑人を安穏ゆ生ぎ代極やゆ
んおくは一生の慢して我も共に昇ト中の世代よ流べしと遊礼
ふも忠代生まれば生れ其遠幸と流く祝一尾上の死籠と
猛人例の鉾血代も流ひ清も祝猛刀と清ゆ納光祝く出家ゲ
祝庵へぞ生やゝとそうる

相和男義代対く主の無義代祝う張
祝く相和と男義が無の房に見立て打義男義い
祝庵に入三く帰母と和代と謝尾る俸使謝うと例通く進
主人尾上平今日貴後の一く世く打ひゆ祝てやゆ
男公儀と紅猪四九代生ひ帰う一す四絞あて絞と相義下
そこべ一やおし猪猪津と岩名代男義と例者こと変ゆる
ば其ち義の義うり相俸代見く醫官の義代る拝く世く和代
先ふ三く室内ゆ先無く尾上ゲ新庵と入拝えゆ安く物四
ゆ一しそうぶ会代祝けいこいうゆ半と深く部尾うこいゆ義
うこと和代和腹刀と祝ゆも男公代皇人の無言えくるうこと
こやく起うく岩義ゲ九の相猪と極ち遠ゆとくこと岩四義

於初
出産
の事

なげし見ひらきしばらく待つ来のうちに上下の雅楽者よく言ひきかせ生合
金の鍔は腕の経刀は提帯して傍に置きたれども自ら痛みを覚え
汝が血三筋之の切先をさぐるに実ゆゑ文二十両の為に命を受けたれ
して手をひき寄せの礼を数ふるに尋ねゆく切付の追手の男の面を振
むしてその身をそこに倒れ伏し初めて我より起きて立ち上がり
其様子に一段とうち驚き姫の悪事は主人の為に出しとて捨て置かれ
此身を捨てしぬる主人の御為と思ひ切り恨みは亡き後の世の
かかる悪事をば主人は悟りしめたる咎人を退け
害しひとつの生害の倍増しは殊に重き罪にして己が身を
は誠に仕へし思ひの数へも足らず一心に自殺に及びたる
知るべしもの誠の先の事と其身は追つて入来る処

娘の刀は事にて付添ふて付け添ひて両人の記録を述べ
て後に其由を申し述べ諸向しるべき事は初めより最早くも私に
に至る尾上が父母の神とも思ひて主人の尾上が最後の思ひを知り
此度の悪事の其事を自殺仕り候段母も止むなく思ひとても願ひは
彼の様子の自殺の尾上が仕へる主君の為に仕へ来しも
付き添ひ下さるべし御恨みを晴らさせ給ひし主君も
依りて御家中の家来共に申し付けし腹をさせ申す
とはいへども尾上が自殺の趣意及び其の傍の御願ひの趣さへ
先祖は一家の様子の調へし本の家の家老の体は主君
と記し同じく申し付け候事は同じく主家の様子にて尾上に相次
其文尾上が死文は又尾上の文と書きよりて尾上が手にて書き出せしによりて来り分

[illegible]

繪本雪鏡談卷十二終

軍書小説類藏板目録

大坂心齋橋通南久寶寺町　伊丹屋善兵衛

源平盛衰記　片假名　廿五冊
後太平記　片假名　廿五冊
殘太平記　同　十二冊
四國軍記　一名土佐軍記　同　十二冊
駿臺雜話　室鳩巣翁の著をおうて仁義の大略を示し　平かな　五冊
續武將感狀記　同　十冊
鬼神の説和漢古今名將勇士の名行を評し治亂の要論紅法紀事詩文の論説老儒の見あり
聖德太子傳圖會　平かな　六冊
楠正行戰功圖會　平かな　十一冊
畫本西遊全傳　四十冊
太田道灌雄飛録　六冊
左衛門大夫太田持資入道道灌三位の政御の後流れて朝倉上杉氏の盛衰文武の英才を惜み取ざる一世の戰功忠義を委くのべたり
繪本玉藻譚　五冊
同白狐傳　一名玉藻物語　十冊

復讐山石見英雄録　全部　五十冊

此書三編まてハ作者名替まり四編以下廿九冊ハ一家の多筆にて記せる山石見氏と申す通編物語説の主人公ハ初編にて玲水堂の五傑と称する勇士の伝を形して由良山嶽の賊徒弾治天稽立の復讐を示顕す作者の新案を費せり七編ハ結局にて総計の一巻あり八冊をもて一部とす

刀筆青砥碑　八冊　同

此書水戸藩語ハ孫亭子の原稿を曲亭翁の筆削せしにて孫を示の教ハ医人名等剽窃の誤て愛妻拉殺を殺し犯も姦夫偽二郎を賜りて盗賊と誣ゆらくして殺さんとせを青砥藤綱ゲ明断各その罪を照て懲せる僅話妙案なり

世俗のいひりて伝ふる安珍の安奈と葛葉ゲるとこれらの一〇作品紙なり

蛍小屋のハ巻　八冊　同

下野国佐野岡城主佐野盛の家臣平四郎國範が忠心遠係の事新平左郎が妖術妖婦夕顔ぐるの怪平太郎が忠孝ハ家面白くものせり

繪本金花談　十二冊　同

雪鏡談　十二冊　同

二嶋英雄記　十冊　同

彦山霊験記　十冊　同

亀山話　十冊　同

合邦辻　十冊　同

浅草霊験記　十冊　同

鎌倉年代圖會　五冊　同

鎌倉の創業より宗尊親王の下向まで於て将軍家五代の間の時事を委くまるせ

金毘羅神霊記　十冊　同

誠忠傳　十冊　同

孝感傳　十冊　同

鎌倉大樹家譜　五冊　同

宗尊親王鎌倉ゲ着陣より累世執権様悪の女雄地條が一門亡びて後醍醐帝天下を平定しまでを

顕勇録　十冊　同

武蔵坊辨慶異傳　十冊　同

奇縁傳　十冊　同

程世中が水滸伝の面目を摸て変化きる親向ゲれば甚興ある小説なり

忠孝美善録　十冊　同

大内多々羅軍記　六冊　同

大内義隆の孫者弘流より嬰児相良武任が佞奢浪人服部を賺ふ隔れを妻を君に進

伊賀越孝勇傳　七冊　同

三島復讐檀之二葉　六冊

むるゆ妖婦生殺の方ゞゆ陶尾張守嬉奴が
大悪逆ゆゑ正史ゆ出入せる面白記稗史あり

近江縣物語　五冊

花山院の御代あるゝゝ坂上梅丸が全盛ゆゝく
盗賊あゝ保輔斎明が残暴ゆ橋ゆ安世がゆ
女関生が奥操安世が勝常人が邪欲情婦のゆ
梅丸ゆゝ保輔斎明ゆ謂ゆ城後征伐
の大将軍あゝ保昌を助けて賊を平らげ終ゆ
近江掾ゆ進み生の父母ゆ逢ゆ住話ゆてその
父の娘あるゆ聞ゆて初ゆべ

昔語松虫墳　六冊

延武の頃ゆ阿波の国の勇士野田太郎清秀氏安
が武勇ゆ桂子ゆ継母桃が奸淫安井隼太が悪
悪妻田勝美義里ゆ世田の家ゆ水沢八が妻
松女が狂死木沢源太郎ゆ非峠の遊女梅木が孝心
松虫墳経塚ゆとの由来ゆ記ゆす

奥州小白田辰の民篠崎三郎右衛門ゆ
千田民弥を欺紀て松田伊織ゆ訴せゆ松
田夫婦と民弥が家民弥が義死見ゆ家親
民弥が庶子民五郎ゆふ童ゆ憑て復讐
させゆを祈せり

壮野霊験　二葉ノ梅　六冊

弧茅の岩賊池上七九郎が竟悪のゆ孝子
菊女と上田茂之二郎が復讐ゆの小説ゆて悪ゆ
年岩見三之亟義侠の老人ゆ教訓がゆゆゆ
を説ゆゆめせり

報然珠話　十かえるの花　六冊

建久年中ゆや出羽の山縣の郷士常盤井内記素
兼則が二男龍二郎美人ゆ仙郷ゆ誘れて教ゆ文
け後年諸弟を助りて父の仇を山伏山ゆ討ちて
仙女去来見ゆ昇天ゆる奇談奇ゆゆ

今昔二牧絵州紙　六冊

天文の頃ゆよ播磨國三木の城主別所長宗の家臣
菴崎兵右夫子女子ゆゆ天文年波山義松ゆ
遠原勇義ゆ紙松三郎左衛門が奸悪ゆ高
村の俳優ゆ義紙ゆゆ絶る話ゆて與あり

矢口續話　新田神霊　忠孝貞婦傳　六冊

大庭伊織信俊八波田阪右衛門ゆ義計ゆ中ら
て自害ゆ妻の里人ゆ家隷ゆる田野助ゆ貞烈
忠勇ゆて寛ゆ雪ゆ孝帝あり

復讐千丈松　七冊

近江の士松井逸崎浪人篠村大蔵ゆ欺殺
れ千丈松両人ゆ年寛家ゆ窺ひ青柳佐市
ゆ茂ゆくもゆ阿波の篠村ゆて志ゆ遂ゆ伝

忠孝人龍傳　五冊

外傳　補家　弥生佐久羅　六冊

補家の良佐恩地左近が女児弥生ゆる佐久源八
佐久左庫ゆ狂死鶴子源二郎が胆勇敢者の
妖を除紀又沢田の里ゆる福屋ゆ女児白秀ゆの奇
遇松本軍ゆが騙術秋山大脳ゆ緑友八尾雷
童丸が滅亡源八清のゆ話ゆべ

骨董　新話　花標因縁車　五冊

小鐘半左清ゆゆ小金と彦熊と伴
ゆて色ゆ
迷ゆ煩悩の常念法師ゆ乃千の堀の因縁ゆ
怪く考ゆ

玉搔頭　五冊

三光の獅ゆゆ玉ゆ
高井土の異服ゆ十ゆ清ゆ裏ゆの表ゆ再会ゆ
ゆ上方ゆ出て百方ゆ挽紀ゆ三百銭両の金
ゆ携ゆ路摺針山ゆ強盗亀四郎ゆ踏

筑前の士人東條図書幼年にして父助を
天が仇山中壮二郎を年久しく伺ひ搜り
和州郡山にて復讐せし事実を録し
て殆常の偉奇筆紙に尽あり

南部　小栗忠孝記　五冊
歓討

奥州南部の士竹内新吾門藩に勤仕の士
小栗毛平を捕み殺害して討殺せし
小栗が僕茂助終に主の仇を復せ
阿波安部の邸き主の妻子に告知せて小栗
の二郎に悉く父の仇を報せし事実あり

長崎聞見録　五冊

理齋随筆　六冊
和漢の雜事何れも新く載られ世に稀
益鮮し

輪廻物語　五冊
安倍仲麻呂唐土に流浪して安南
に帰明の海を渡り唐土に悪く給
ふ故に仲麻呂を流して浮屠張陽西に
流を附給へり詳に唐土にて空の
自ら和漢の史外に出し奇話とす

金屋金五郎全傳　五冊
流花堀江の市人金五郎が風儀ありて義侠
ある南蛮額の小こが情実の情を忘れざる彼
半附漏左衛門が辣性を可恐き後に半附竜
蔵と異して郷人あるの一小説あり

風流茶人氣質　五冊

文学堂蔵書

繡像復讐岩見英雄録　全部　五十冊

南海　玉藻主人　編輯
浪花　一蕚富歌川芳梅　画

○初編　七冊　東師人作　○二編　玉藻主人嗣著　○三編　東陽子嗣著　○第四輯以下作者一家
永禄天正の頃筑紫名嶋の豪士岩見重太郎橘種李が生さちより武者修行
せし世の武功大蛇の害を除き老狸の妖を殺し雄勇威徳大川水三人の大敵を撃て父兄の怨恨を晴し絶小室町殿に奉仕て任官
し給ふ主水正は敵を撃る毒間は富士峯豪が女邪淫婦山岩瀑孝女新月ホ
給ふ黒の五雄と称する勇士の列偉霊猿悪魚の怪談ホ五輯より益入佳境新話あり

浪花書肆

南久寶寺町心齋橋ハ入
伊丹屋善兵衛板